

# 博物学の人魚表象 魚・女性・哺乳類

ゲート自然科学の集い2017年総会  
2017年11月11日 於：平安女学院大学  
発表者：中丸禎子（東京理科大学）

## 1. 先行研究と問題提起

### (1) 「人魚」のイメージ

- ※ アンケート集計結果⇒人魚は美しい女性だが、モデルはジュゴンやマナティ
- ※ 『広辞苑』第5版（1998）・第6版（2008）  
にんぎょ【人魚】  
上半身が人間の女、下半身が魚体という想像上の生物。〈和名抄一九〉→儒艮（第5版）  
上半身が人間（多くは女人）で、下半身が魚の形をした想像上の動物。〈和名抄一九〉→儒艮（第6版）

### (2) 先行研究と問題提起

#### ①人魚は女性？

- ※ 従来の「女性の人魚の系譜」研究
  - アンドレアス・クラス『人魚たち 不可能な愛の物語』（ドイツ語/S. Fischer Verlag, 2010）
  - 小黒康正『水の女』（九州大学出版会、2012）
  - 九頭見和夫「日本の「人魚」像」（和泉書院、2012）⇒ヨーロッパ文化における「人魚」の起源をギリシア神話のセイレーン（鳥⇒魚）に求める
- 女性の人魚を題材とした伝説・文学作品
  - ◇ セイレーン伝説、メリュジーヌ伝説、ウンディーネ伝説
  - ◇ 『動物寓意譚』におけるセイレーン
  - ◇ フケー『ウンディーネ』（1811）
  - ◇ アンデルセン『人魚姫』（1837）
  - ◇ ワイルド『漁師とその魂』（1891）
  - ◇ カフカ『セイレーンたちの沈黙』（1917）
  - ◇ バッハマン『ウンディーネ行く』（1961）
  - ◇ 森鷗外『うたかたの記』（1892）
  - ◇ 谷崎潤一郎『人魚の嘆き』（1917）
  - ◇ 小川未明『赤い蠟燭と人魚』（1921）
  - ◇ 安部公房『人魚伝』（1962）
- ※ 男性人魚の神話・伝説
  - バビロニア神話：オアンネス（世界最古の人魚表象）、ダゴン
  - ギリシア神話：トリトン、ネレウス、オケアノス
  - ノルウェー「王の鏡」：ハーフストラムブル
  - スウェーデン民話：ネッケン
  - デンマーク民謡『アウネーテと人魚』（1300頃・口承）：人間の女性アウネーテと男性人魚（上半身が人間の男性、下半身が魚）の悲恋。
    - ◇ バックセン『ホルメゴーのアウネーテ』（1808）
    - ◇ エーレンスレーヤ『アウネーテ』（1812）
    - ◇ アンデルセン『アウネーテと人魚』（1834）：『人魚姫』（1837）の前身  
⇒アンデルセンにとって、「人魚は女性」は自明ではなかった。
  - クライスト『水の男とセイレーン』（ドイツ、1811）
  - アーノルド『捨てられた人魚』（アイルランド、1849）
  - プロイスラー『小さい水の精』（ドイツ、1956）
- ※ 女性の人魚の系譜研究⇔男性の人魚の例の多さ
  - 「女性の人魚の系譜」研究は、現代の研究者自身が抱く「人魚は女性である」というイメージを元に、女性の人魚だけを意識的・無意識的にピックアップした？
- ※ 問題提起：なぜ女性？⇒ヒントとしての「ジュゴンの授乳」

#### ②人魚のモデルは授乳するジュゴン？

- ※ 「人魚のモデルはジュゴン（日本）」「人魚のモデルはマナティ（欧米）」
- ※ 『広辞苑』第5版（1998）・第6版（2008）  
じゅごん【儒艮】（マレー語から）カイギウ目ジュゴン科の哺乳類。全長約三メートル。尾は横に扁平な尾鰭となる。後肢は退化。インド洋・南大西洋の沿岸の浅海に生息し、海草を食べる。立泳ぎをしながら、子を抱いて授乳する姿から古来これを「人魚」とした。沖縄で犀魚。天然記念物。

- マナティ：カイギュウ目マナティ科。河川・湖・河口・沿岸に生息する大型哺乳類。
  - ◇ ジョルジュ・キュヴィエ（Georges Cuvier, 1769-1832）『動物界』（1817）  
長らく人魚とされていた生物はマナティ。誤解の原因は、手のような鰭、髪のような毛、乳房、上半身を水から出しての立ち泳ぎ
- ジュゴン：カイギュウ目ジュゴン科。熱帯や亜熱帯の浅海に生息する大型哺乳類。
  - ◇ 南方熊楠（1867-1941）『人魚の話』（1910）  
人魚のモデルはジュゴン。頭が人に似、母親が一つの鰭で子どもを抱き、もう一つの鰭で立泳ぎをし、母子ともに水面に顔を出す。子を愛する。

※ 博物学の観点からの先行研究

- 神谷敏郎『人魚の博物誌—海獣学事始』（1989）
  - 吉岡郁夫『人魚の動物民俗誌』（1998）
    - ◇ 海牛の生態と人魚伝説の齟齬を指摘
      - 海牛は暖かい海に棲息。人魚伝説の分布と重ならない
      - 海牛には、海面に上半身を出して立ち泳ぎをしながら授乳する習性はない
        - ☆ ただし、前胸部に2つの乳房（比較：多くの哺乳類は鼠蹊部に複数の乳房）
- ⇒海牛を人魚と見間違えたために人魚伝説が成立したとは考えられない
- ◇ 人魚の「真のモデル」を探求（リュウグウノツカイ、アザラシ）

※ 問題提起

- **なぜ、分布や実際の生態に反して、カイギュウが人魚とされたのか？**
- **博物学書には雌雄の人魚が掲載されているのに、なぜ、「雌の授乳」が人魚伝説の根拠とされたのか？**

※ 想定できる背景

- 当時のジェンダー観
- カール・フォン・リンネ：動物図鑑から人魚を削除  
「哺乳類」=Mammalia（乳房類）という概念を創始。それまでは「魚類」とされてきたマナティを「哺乳類」に分類

※ 研究方法

- 博物学の歴史における人魚とマナティの位置づけの変遷を考察
- 「上半身が女性」「授乳する海牛がモデル」という現代の人魚のイメージの根拠を追究  
比較：博物学以外の背景
  - ◇ キリスト教的伝統：女性＝「男性を惑わす異教的他者」
  - ◇ セイレーン
  - ◇ ラファエル前派の絵画
  - ◇ アンデルセン『人魚姫』、フケー『ウンディーネ』、ハイネ『ローレイ』などの文学作品

## 2. 博物学における人魚

### (1) 博物学とは

※ 動物・植物・鉱物を収集して種類や性質を研究する学問

- ヨーロッパでは、古代ギリシア・ローマ時代にはじまる
- ヨーロッパ以外の地域でも研究
  - ◇ 中国では、神仙思想を背景に、薬草研究が「本草学」として発展
  - ◇ 日本では中国の影響のもと、奈良時代に「本草学」開始。江戸時代に「蘭学」と融合して発展
  - ◇ イスラム圏では、8世紀から15世紀にかけて、ヨーロッパの影響も受けた「イスラム科学」として発展
- ルネサンス時代以降、イスラム科学はヨーロッパの博物学に影響を与えた
- ヨーロッパでは、大航海時代以降の珍品収集、18世紀の博物学者リンネとビュフォンの人気を受け、「博物趣味」として一般に流行
- 現在の学問・文化の基礎
  - ◇ 動物学・植物学⇒生物学
  - ◇ 鉱物学⇒地学など
  - ◇ 王室・国家の物趣味収集物⇒博物館

### (2) 古代ギリシア・ローマ、中世の博物学

- ※ アリストテレス『動物誌』（BC343頃）全10巻・520種⇒人魚に当たるものはない
- ※ プリニウス『博物誌』（AD77）全37巻・約2万項目（天文、地理、人間、動物、昆虫、植物、薬草、

<第9巻 水生生物の性質 4> (抜粋)

ティベリウスが送った使節団が、トリトンとネレウスについて報告。トリトンは洞窟で法螺を吹く。ネレウスは人間の部分にも毛が生えている。ネレウスは過去にも同じ海で目撃され、沖合で死にかけているときの嘆きの声を浜辺の住人達が聞いた。故アウグストゥスへの報告には、おびたしいネレウスの屍体の報告がある。ガデス湾（スペイン）では、体のすべての部分が人間に似た「海人」が夜に船上がってきて、その重みで船が沈む。

- ※ 『フィシオロゴス』(AD2C~/ギリシア語)：アリストテレス『動物誌』、プリニウス『博物誌』、インド、ヘブライ、エジプトの動物伝承に基づいた教本。聖書に登場する生物について、聖書の引用、自然科学的な解説、道徳的な教え。1000年にわたってラテン語のほか10以上のヨーロッパ言語に翻訳され、その都度、内容が変容。
  - 『動物寓意譚』(Bestiary)：『フィシオロゴス』の翻訳の一部。12世紀に全盛期、多くの写本作成⇒「トリトン」や「ネレウス」よりも「セイレーン」が多く扱われる?←キリスト教における女性観の変遷?
- ※ 古代・中世の博物学の特徴
  - 人魚を世界のどこかに実在する動物として扱う
  - 生物の大きさ、棲息地、生態など「科学的」記述が少ない⇒死ぬ時の嘆きの描写など「文学的」記述がある⇒「科学」と「文学」の未分化+人間らしい特徴
- ※ 中世の博物学：停滞
  - ローマ科学の衰退(3C~/)、キリスト教の公認(4C~/)
    - ◇ 「異教的なもの」への不寛容、古典を写す際の誤写・誤解
  - 「薬草学」(修道院)、『動物寓意譚』(教訓)など一部のみ発展
  - ビザンティン帝国での維持・発展
    - ◇ キリスト教の浸透により東方の諸都市に逃れたユダヤ人・ギリシア人の科学者がギリシアの知識と文献を伝え、イスラム科学者がアラビア語訳

### (3) 大航海時代

- ※ ルネサンス
  - 博物学の再興
    - ◇ 「信仰中心」の価値観転換、キリスト教以外への興味
      - ◆ 古代ギリシア・ローマ ◆ ヨーロッパ外の自然・風習・産物
    - ◇ イスラム圏で維持・発展した博物学の再受容
      - ◆ 東ローマ帝国：ギリシア人・ユダヤ人・イスラム教徒
      - ◆ 医学・化学(錬金術)・数学・天文学(占星術)
      - ◆ ギリシア語文献のアラビア語訳
      - ◆ 15世紀中葉：東ローマ帝国の衰退・滅亡⇒ギリシア人科学者のヨーロッパ移住
- ※ 人魚の目撃記録

コロンブス『コロンブス航海誌』(1492-93)

「リオ・デ・オロを遡上して行った時、海上高く3匹の人魚が飛び上がるのを見た」

マガリャンイス(マゼラン)『ブラジル誌』(1576)

「この魚は非常に大きい〔中略〕。鼻が牛に似ている。腕のような鰭が二つあり、泳ぐときはこれをつかう。雌には乳首が二つあり仔はその乳を飲んで育つ。尾は幅が広く少し平たいがあまり長くない」

マナティ(中南米に棲息)やジュゴン(インド洋・北太平洋・紅海に棲息)を目撃したと思われる

⇒マナティやジュゴンの人魚と見間違えたために人魚伝説が生じたのではなく、人魚のいる「世界のどこか」をヨーロッパ人にとって未知の世界である「新大陸」に求めた

#### ※ 人魚の証拠

- ピエール・ブロン(フランス)『水生動物図解』(1553)
  - ◇ 「ジェニー・ハニヴァー」(エイの干物の加工品)の最初の記録
    - ※ブロンの著書には「ジェニー・ハニヴァー」という名称は出ていない
  - ◇ 人魚のミイラ：日本や中国でサルの上半身とサケなど大型の魚の下半身を継ぎ合せて作られ、ヨーロッパに輸出

僧侶魚(Monachus piscis)

もし僧侶魚について、ノルウェーのDiezuntと呼ばれる種族のもとで、Den Eleepochという町の近く

で見られたと伝えられることが本当だとすれば、私は先に挙げた奇獣たちの姿や形がどこかで容易に確かめられると信じることだろう。僧侶魚の形については次の図版が示している。この魚は3日しか生きることができず、いくばくかの、とても苦しそうで悲しげな息を除けば、まったく声を出さなかったと言われている。自然はあたかも戯れのようにこうしたものすべてを産みだしうるのだが、私たちは容易に考察することができる。」

- コンラート・ゲスナー（スイス）『動物誌』（1551-58）
- アンブローズ・パレ（フランス）『怪物と脅威』（1582）
- ウリッセ・アルドロヴァンディ（イタリア）『怪物誌』（1642）

ナイル川の怪物のつがい（Monstra Niliaca Parei）

ナイル川で釣れ、ローマ法王に献上。上半身は人間に似て、髪はブロンド、腹には骨があり、腕には関節がなく、下半身は魚。一匹は女性、一匹は男性に見える

修道士姿の海の怪物（Monstrum Marinum effigie Monachi）

僧侶の姿の海の怪物。ノルウェーの den Elepoch の街の近郊で、修道士の姿の海の怪物が見つかる。3日間生存し、何も話さず、悲しそうなため息だけつく。老いた漁師たちはしばしば海の深いところからため息を聞いたそうだ

※ 人魚の解剖

- ヤン・ヨNSTON（ポーランド）『禽獣魚介蟲図譜』（1649-57）

ヒト形目（の魚）（Anthropomorphos）

頭は丸く、首がない。軟骨を肉が覆う耳や、目の構造・色は人間と同じだ。歯は魚のようだ。腕は長くはないが、幅が広く泳ぐのに適している。肘と腕と手と関節の区別がない。尾は魚と同じ形である。

- トマス・バルトリン（デンマーク）『希少生物の解剖学誌』（1654-1661）※リンパ系の役割を解明した解剖学者

<第10章 Sirenis sea Marini Hominis Anatome>（抜粋）

（人魚と海人の解剖）

人魚（Siren）についての伝承は、正しい部分と間違った部分がある。人間をまねて言葉を話すのは誤りだが、男性を誘惑するのは正しい。西インド会社がブラジルの近くで発見した海人を解剖したところ、頭と胸、臍までは人間とよく似ていたが、臍から爪先までは不格好で、尾の痕跡は存在しなかった。手には我々と同じく5本の指があるが、指先の骨は幅が広く、圧縮されていて、ガチョウやアヒルのような水かきがついている。撓骨と肘は泳ぐのに適するため屈曲し、横向きの指で四本分の長さである。肋骨は十分に長く、太く、人間より三分の一長い。

※ 古代・中世と大航海時代の共通点

- 感情などの「文学的」記述がある  
〔例〕プリニウス（77）「死にかけているときの嘆きの声」  
アルドロヴァンディ（1642）「何も話さず、悲しそうなため息だけつく」

※ 古代・中世と大航海時代の相違点

- 「正確な」図  
〔背景〕実物、ミイラ、剥製などの観察可能性、木版印刷術の普及・優秀な画家の存在
- 分類の開始：アルファベット順や恣意的な順ではなく種類による
- 解剖学的な記述の開始

#### （4）啓蒙の時代

※ 人魚の分類

- ペーテル・アルテディ（スウェーデン）『魚類学あるいは魚類に関する全著作』（1738）  
※近代魚類学の先駆的書物

I. Malacopterygii ※ギリシア語（「やわらかい鱭」／軟鱭亜目）

II. Acanthopterygii（「棘のある鱭」／棘鱭上目）

III. Branchiostegi「鰓骨」／硬骨魚綱

IV. Chondropterygii（「軟骨鱭」／軟骨魚綱）

V. Plagiuri（「平尾」（横の尾）＝尾が水平の「魚」）博物学における人魚（4）啓蒙の時代

46. マッコウクジラ 47. イルカ 48. クジラ 49. エビ 50. イッカククジラ  
51. マナティ（Trichecus） 52. 人魚（Siren）

<人魚 (Siren) > (抜粋)

歯 ...ヒレ、全身に2枚のみ、胸部にある。羽毛のついた尾はない。頭部、首と胸は臍のところまで人間のよ  
うな形状をもつ。

バルトリンの『比較解剖学』に記載。Barchewitzius は、『インド・オリエント誌』(1730)で、目撃した  
海人 (Homo marinus) はマナティや他のあらゆるものとはまったく異なると述べている。これは、バルト  
リンの人魚 (Siren) と同じものである。バルトリンの人魚はアメリカのマルセイユ近くの海で商人に発見  
され捕獲された。胸部部の2枚のヒレは、薄い皮でつながる指に似た5本の骨からなり、人魚はこれを使  
って泳ぐ。その幅は約4フィートである。

この動物を検証し、それがお伽話なのか本当の魚なのかを確かめるような真の魚類学者が現われてくれれば  
よいのだが。見たことのないものについては、不用意に何かを公言するより、判断を保留するほうがよい

※ **カール・フォン・リンネ** (Carl von Linné, 1707-1778) : スウェーデンの医師・生物学者。学名  
「二名法」による生物分類を提唱した「分類学の父」

➤ ラテン語、「属」と「種」(例) ホモ・サピエンス (Homo sapiens)

〔背景〕 既知の動植物の種類の爆発的な増加と複雑な命名に伴う混乱、言語による意味の相違

(例) アカシカ : Cervus cornibus ramosus teretibus invurvis (枝分かれし、かつ内側に楕円形に  
湾曲した角を持つシカ) ⇒ 二名法で Cervus elaphus

(現代の例) Blackbird : イギリスでは「クロウタドリ」(美しい声で知られる)、アメリカでは「ムク  
ドリモドキ」(不吉なイメージ)

➤ 植物学者として名声を博す

✧ 性体系 : 雄しべの数で「綱」、雌しべの数で「目」を決定⇒それまでは相観(木か草か、高さ)で分類

➤ 『自然の体系』初版(1735)

I. Quadrupedia (四足綱 ※アリストテレス以来の分類)

• Anthropomorpha (ヒト形目) : ヒト、サル、ナマケモノなど

• Ferae (猛獣目) • Glires (ヤマネ目) • Jumenta (大獣目) • Pecora (畜獣目)

II. Aves (鳥綱)

III. Amphibia (両生爬虫綱)

IV. Pisces (魚綱) ※アルテディの項目名に基づく

• Plagiuri (平尾目) : クジラ、イルカ、マナティ

• Chondropterygii (軟骨鱗目) • Branchiostegi (鰓条目)

• Acanthopterygii (刺鱗目) • Malacopterygii (軟鱗目)

V. Insecta (昆虫綱)

VI. Vermus (鞘翅綱)

Paradoxa (矛盾綱) ※「両生爬虫綱」下部の空きスペース

• Hydra (ヒドラ) • Rana-Piscis (イザリウオ) • Monoceros (イッカクジュウ/現在のイッカククジラ)

• Pelecanus (ペリカン) • Satyrus (サテュロス) • Borometz (ボロメツ)

• Phoenix (フェニックス) • Bernida (コクガン) • Draco (ドラゴン) • Automa Mortis (シハンムシ)

(第2版で追加) • Manticora (マンティコア) • Antilope (レイヨウ) • Lamia (ラミア)

• Siren (人魚)

両生爬虫類の註「恵み深い創造者は両生爬虫綱がいつまでも繁栄することを欲しなかった。両生爬虫綱が他の動物の綱と同じだけの数の綱を擁してその繁栄を楽しんでいるなら、あるいは、神がドラゴン、バジリスク、および同様の怪物を創造したということが真実なら、人類は地球上に存在することができなかったかもしれない。」

Siren についての説明「アルテディの『魚類学』81 ページ : バルトリンの人魚 : 生きた状態であれ、死んだ状態であれ、目撃(現物が確認)されたことがなく、また、十分確実かつ完全に記述されてもいない以上は疑わしい。」

※ リンネによる人魚とマナティの分類

➤ 『自然の体系』初版(1735)

✧ 人魚 : 掲載せず

✧ マナティ : 「魚類」の「平尾目」

➤ 『自然の体系』第2版(1740)

✧ 人魚 : Paradoxa (矛盾綱) に掲載⇒存在が疑わしく、存在するとしても両生爬虫綱(繁栄が望まれない)の亜種として記載

➤ 『自然の体系』第6版(1748)

✧ 「矛盾綱」を削除⇒人魚が動物図鑑から消える

✧ マナティは引き続き「魚類」として掲載(～第9版)

- ※ 『自然の体系』第10版(1758):「四足獣」に代わり「哺乳綱」という新たな分類名を考案。被毛・胎生で雌が乳を出す生物。

I. Mammalia (哺乳綱 ※リンネが提唱)			
• Primates (霊長目): ヒト、サル、ヒト上科 (チンパンジー、ゴリラ、オランウータン)、キツネザル、ヒヨケザル、コウモリ			
• Bruta (鈍重目): ソウ、マナティ、ナマケモノ、アリクイ、センザンコウ			
• Bestiae (吻獣目) • Glires (ヤマネ目) • Pecora (畜獣目) • Belluae (蹄獣目) • Cete (鯨目)			
II. Aves (鳥綱)	III. Amphibia (両生綱)	IV. Pisces (魚綱)	
V. Insecta (昆虫綱)	VI. Vermus (鞘翅綱)		

※ナマケモノは初版では「ヒト形目」 ※クジラ、イルカは「鯨目」に分類

⇒マナティを「霊長目」に近い「哺乳綱」「鈍重目」に分類

### ※ 人魚のモデル

- 『自然の体系』第6版(1748)で「人魚」の項目を削除⇒人魚の非実在が確定⇒モデル探し
  - ◇ 現在のカイギュウ目: マナティ科、ジュゴン科、(ステラーカイギュウ科/絶滅)
- マナティの分類
  - ◇ アルテディ: 「魚綱」「平尾目」⇒クジラ、イルカ、エビと同類
  - ◇ リンネ『自然の体系』(第10版): 「哺乳綱」「鈍重目»: ソウ、マナティ、ナマケモノ、アリクイ、センザンコウ
  - ◇ リンネ『自然の体系』(最終第13版、1788): 「哺乳綱」「Trichechus 属»: ジュゴン、マナティ、セイウチ
- ⇒クジラ、イルカ、セイウチなど他の大型海洋哺乳類との分類関係が現在と違う
- ヨハン・イリガー (Johann Illiger, 1775-1813) 『哺乳綱と鳥綱の体系書』(*Prodromus Systematis Mammalium et Avium*, 1811): 「海洋哺乳類」「シレーニア(カイギュウ目)»: マナティ、ジュゴン、ステラーカイギュウ> 「セイレーン」にちなむ
  - ※1811年のドイツでは、フケー『ウンディーネ』、クライスト「水の男とセイレーン」の二つの人魚文学が成立⇒**実在の動物から架空の生き物へ**

### ※ ジョルジュ・キュヴィエ『動物界』(1817)

- 「哺乳綱」「鯨目」「草食属」にマナティ、ジュゴン、ステラーカイギュウを記載

#### <草食性の鯨目>

草食性のクジラ目は平らで冠状の歯を有している。このことは草食性のクジラ目の生活様式を決定しており、腹ばいに進んだり、岸辺に草を食みに来るために、しばしば水中から姿を現すのである。胸部には二つの乳房があり、口ひげの部分には体毛が生えている。遠方から見るとこの二つの状況は、水中から垂直方向に上半身を現す時、人間の男女の姿と類似しているような印象を与えたので、おそらくトリトンやセイレーンにまつわる空想物語を生み出すきっかけとなったのだろう。頭蓋骨の鼻骨にあいた鼻孔は上方を向いているものの、鼻面の先端にある皮膚にしか鼻の穴は空いていない。

- 男女の人魚(トリトンとセイレーン)伝説との関連を指摘 ◇ 「乳房」「口髭」に着目

#### <マナティ> (抜粋)

腹ばいに進んだり、子供を運んだりするために巧みに胸ビレを用いる。たくさんの袋に別れた胃袋、二つに分岐した盲腸、膨らんだ結腸は草食動物特有である。その生活様式のため「牛」(boeuf)や「海牛」(vache marine)とも呼ばれ、その乳房のため「海女」(femme marine)とも呼ばれる。アメリカのマナティはアフリカのとは別種で、長さは15ピエ(4.8m)以上。肉は食用。

#### <ジュゴン> (抜粋)

インド洋に棲息する種が知られ、たくさんの旅人がマナティと混同した。人魚(Siren)、海の牛などと呼ばれる。

- 女性の人魚(セイレーン)伝説との関連を指摘 ◇ 「乳房」「子ども」に着目

## 3. 人魚はなぜ女性なのか

### (1) シーピングの博物学批判

- ※ リンネの「哺乳類」: 「四足獣」にヒトを分類することを批判され、「授乳」に着目して、「乳房類」(Mammalia)と命名。(mammae=乳房/日本語では「哺乳類」と翻訳)
- ※ ロンダ・シーピング『自然の身体』(1993): リンネの自然体系には、リンネの/当時のジェンダ

## 一観が反映されている

- 植物を「性体系」で分類
  - ◇ 雄しべ＝「花婿」、雌しべ＝「花嫁」、受粉＝「結婚」
  - ◇ 雄しべで「綱」、雌しべで「目」を決定⇒上位の「綱」を雄しべ、下位の「目」を雌しべにあてる⇒人間社会のジェンダー・ヒエラルキーを科学に導入
- 「四足獣」に代わる新しい分類名の他の可能性
  - ◇ ジョン・レイ（1627-1705）※リンネの二名法に影響を与えた博物学者
    - 胎生動物（クジラなどの水生哺乳類を陸生四足獣類と結びつける概念）
    - 被毛動物（陸生四足獣と水陸両生のマナティを包括する概念）
  - ◇ ペーテル・アルテディ（1705-35）※リンネの魚類項目
    - 多毛動物
  - ◇ 「授乳」を最重要視することの不自然さ
    - 哺乳類の半分＝雌のみで機能
    - 雌の場合も授乳期は短期間（授乳期以外は機能しない）
    - 雄に乳首がない哺乳類もいる（馬など）
- **乳母廃止運動（18世紀）**
  - ◇ 家庭の維持と子どもの世話は女性／母親の役割
  - ◇ 乳母制度は高い乳児死亡率の原因
- リンネ：乳母廃止運動を支持。体毛を乳房と並ぶ哺乳類の主要な特徴と認めつつ、「哺乳類」という分類名を採用
  - ◇ クジラ、ライオン、トラなど獐猛な大型獣の雌が自らの乳で仔を育てることを引きあいに出し、人間の女性も自身の母乳で子育てをすべきと主張
    - 人間の女性の家庭における役割を固定
    - **女性の「本能」「野性」を強調／乳房は人間を動物と結びつける指標**  
【比較：「ホモ・サピエンス」（知恵ある男）⇒理性・知性＝男性の性質＋人間を動物と分離する指標】
- サラ・バールトマン：南アフリカ出身の奴隷。「ホッテントットのヴィーナス」と呼ばれ、イギリスで見世物にされる。 ※「ヴィーナス」は愛の女神（＝性欲、獣性の象徴）
  - ◇ ジョルジュ・キュヴィエの人種研究：バールトマン（病死）の解剖
    - 頭脳に関する調査の少なさ＋生殖器・乳房の詳細な調査
  - ⇒キュヴィエの結論：バールトマンは「**性と人種の両面において獣界に属す**」

## (2) 考察と結論

- ※ 人魚はなぜ女性なのか
  - **比較：古代・中世・大航海時代の人魚：水に棲む「人間」**
    - ◇ 古代：嘆きの声（プリニウス）
    - ◇ 中世：「異教的他者」（男性を誘惑する悪女）⇒人間の誘惑・結婚が可能な人間的存在
    - ◇ 大航海時代：苦しそうな息（プロン）、「ヒト形目」の魚（コンストン）、言語の有無の議論・理性の想定（バルトリン）
  - 比較：大航海時代～アルテディの人魚：実在の「魚」（マナティと同種）
  - 小黒康正『水の女』：「水の女」（Wasserfrau）＝言語コミュニケーションが不可能な「他者」
    - ◇ クライスト「水の男とセイレーン」⇒水の男よりもセイレーンの方が他者性が強い
    - ◇ 水の男（Wassermann）：ドイツ語、言葉を覚える、足があり歩行を覚える
    - ◇ セイレーン（Siren）：外来語、言葉を覚えない、糸紡ぎ（手仕事）、足がない
  - **リンネとキュヴィエの人魚：「哺乳類」のマナティをモデルとする動物**
    - ◇ マナティの「授乳」の強調⇔人魚の子育て伝説？
    - ◇ 「人間」ではなく「動物」
    - ◇ **授乳（「母性」「本能」「獣性」）：メスのマナティ、女性人魚、人間女性の「あるべき姿」**
- ※ **女性人魚は、雌のマナティと人間女性をつなぐ「獣」**

＜謝辞＞ ラテン語翻訳：斉藤渉さん（東京大学）、高田成平さん（東京大学博士課程）  
フランス語翻訳：小沼義雄さん（埼玉県立大学）  
ギリシア語翻訳：古澤ゆう子さん（一橋大学名誉教授）

## <参考文献>

### 博物誌原書・完訳

- ◆ アリストテレス『動物誌』 島崎三郎訳、岩波文庫、1998
  - ❖ *Ἀριστοτέλης: Περὶ τὰ Ζῷα Ἱστορία*
- ◆ ペーター・アルテディ『魚類学あるいは魚類に関する全著作』（ライデン、1738）
  - ❖ Peter Artedi: *Ichthyologia, sive opera omnia de piscibus*, Leiden, 1738
- ◆ ウリッセ・アルドロヴァンディ『怪物誌』（ボローニャ、1642）
  - ❖ Ulisse Aldrovandi: *Monstrorum historia, Bologna, N. Tebaldinus 1642 und Serpentum et Draconum historia*, Bologna, C.Ferronius 1640
- ◆ ジョルジュ・キュヴィエ『動物界』（パリ、1817）
  - ❖ Georges Cuvier: *Règne animal*, Paris, 1817
  - ❖ Georges Cuvie: *Hyrax Capensis*. In: T. Edward Bowdich: *An Analysis of the Natural Classifications of Mammalia, for the use of students and travellers*, Paris, 1821
- ◆ コンラート・グスナー『動物誌』（チューリッヒ、1551-58）
  - ❖ Conrad Gesner: *Historiae animalium*, Zurich, 1551-58
- ◆ ピエール・ブロン『水生動物図解』（パリ、1553）
  - ❖ Pierre Belon: *De aquatilibus, libri duo cum conibus ad viam ipsorum effigiem, quoad eius fieri potuit, expressis*, Parisiis, 1553
- ◆ トマス・バルトリン『希少生物の解剖学誌』第3巻・第4巻（ハーグ、1654-1661）
  - ❖ Thomas Baltholin: *Historiarum anatomicarum rariorum centuria III et IV*, Vlaccq, 1657
- ◆ アンブロワーズ・パレ『怪物と脅威』（リヨン、1562）
  - ❖ Ambroise Paré: *Des monstres et des prodiges*, Lyon, 1573
- ◆ 『プリニウスの博物誌—第7巻～第11巻—』中野定雄・中野里美・中野美代訳、雄山閣、1986
  - ❖ *Πλίνιος: Φυσικὴ Ἱστορία / Plinii Naturalis Historia*
- ◆ 南方熊楠『人魚の話』、中沢新一編『南方熊楠コレクションⅢ 浄のセクソロジー』所収、河出書房新社、1991
- ◆ ヤン・ヨンスン『禽獣魚介図譜』（アムステルダム、1657）
  - ❖ Joannes Jonstonus: *Historiae naturalis*, Amsterdam, 1657
- ◆ カール・フォン・リンネ『自然の体系』第1版（ライデン、1735）～第13版（ライプツィヒ、1793）
  - ❖ Carl von Linné: *Systema Naturae*, 1735-1793
  - ❖ カール・フォン・リンネ「自然の体系」（初版）遠藤泰彦・高橋直樹・駒井智幸訳、『特別展 リンネと博物学—自然誌科学の源流—』所収、千葉県立中央博物館、1994、153-154
  - ❖ 第1版（Leiden, 1735）所蔵：Missouri Botanical Garden  
閲覧：BHL <https://www.biodiversitylibrary.org/item/15373#page/2/mode/1up>
  - ❖ 第2版（Stockholm, 1740）所蔵：ハーバード大学  
閲覧：Google Books [https://books.google.co.jp/books?id=oXsZAAAAAYAAJ&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books?id=oXsZAAAAAYAAJ&redir_esc=y)
  - ❖ 第6版（Halle, 1747）所蔵・閲覧：バイエルン州立図書館  
<http://reader.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10076011.html>
  - ❖ 第10版（Stockholm, 1758）所蔵・閲覧：バイエルン州立図書館  
<http://reader.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10076014.html>
  - ❖ 第13版 所蔵：Missouri Botanical Garden  
閲覧：BHL <https://www.biodiversitylibrary.org/bibliography/545#/summary>
  - ❖ カール・フォン・リンネ『シレン・ラセルティナ』（ウップサラ、1766）
    - Carl von Linné / Abrahams Osterdam: *Siren lacertina*, Upsalie, 1766
  - ❖ 『動物寓意譚』The Medieval Bestiary <http://bestiary.ca/>

### 研究書

- ◆ 荒俣宏『怪物誌（ファンタスティック12）』リプロポート、1991
- ◆ 岡崎勝世『科学 vs. キリスト教 世界史の転換』講談社現代新書7、2013
- ◆ 小黒康正『水の女 トボスへの航路』九州大学出版会、2012
- ◆ 神谷敏郎『人魚の博物誌—海獣学事始』思索社、1989
- ◆ リチャード・カーリントン『失われた動物』内藤初穂・真城正明訳、図書出版社、1978
  - ❖ Richard Carrington: *Marmails and Mastodons*. Chatto & Windus, 1957
- ◆ 九頭見和夫『日本の「人魚」像』和泉書院、2012
- ◆ 国立歴史民俗博物館図録『大ニセモノ博覧会 偽造と模倣の文化史』、2015
- ◆ ロンダ・シービンガー『女性を弄ぶ博物学—リンネはなぜ乳房にこだわったのか?』小川眞里子・財部香枝訳、工作舎、1996
  - ❖ Londa Schiebinger: *Nature's Body. Gender in the Making of Modern Science*, Rutgers University Press, 1993
- ◆ 千葉県立中央博物館『特別展 リンネと博物学—自然誌科学の源流—』、1994
- ◆ ピーター・ダンス『博物誌 世界を映すイメージの歴史』奥本大三郎訳、東洋書林、2014
  - ❖ S. Peter Dance: *The Art of Natural History: Animal Illustrators and Their Work*. Overlook Press, 1978
- ◆ ヴィック・ド・ドンデ『人魚伝説』荒俣宏監修、富樫環子訳、創元社、1993
  - ❖ Vic de Donder: *Le Chant de la sirène*. Gallimard, 1992
- ◆ 中丸禎子「人魚姫が浮かび上がるとき アンデルセン『人魚姫』における主体的な女性とデンマークの人魚モチーフ文学における原型」、『ドイツ文学』148号、日本独文学会、2014年3月、pp.129-139
- ◆ 中丸禎子「博物学の人魚表象—魚、女性、哺乳類—」、『比較文学』58巻、日本比較文学会、2016年3月、pp.7-23
- ◆ 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本』（上下）紀伊國屋書店、1999
- ◆ 松永俊男『博物学の欲望 リンネと時代精神』講談社現代新書、1992
- ◆ キャロル・キサク・ヨーン『自然を名づける—なぜ生物分類では直感と科学が衝突するのか?』三中信宏・野中香方子、エヌティティ出版、2013
  - ❖ Carol Kaesuk Yoon: *Naming Nature: The Clash Between Instinct and Science*. W. W. Norton & Company, 2010
- ◆ 吉岡郁夫『人魚の動物民俗誌』新書館、1998
- ◆ Andreas Kraß: *Meerjungfrauen. Geschichten einer unmöglichen Liebe*, S. Fischer Verlag, 2010

中丸 禎子（なかまる・ていこ／北欧文学・ドイツ文学／東京理科大学）

メールアドレス：nakamart@rs.tus.ac.jp

個人ウェブサイト：[http://www7b.biglobe.ne.jp/nakamaru\\_teiko/index.html](http://www7b.biglobe.ne.jp/nakamaru_teiko/index.html)

共同研究「プロジェクト人魚」ウェブサイト：<http://www.rs.tus.ac.jp/nakamart/index.html>

## 人魚アンケート 集計結果

総回答者：ゲーテ自然科学の集い参加者ほか 18 名（20 代～50 代、複数回答）

（ ）内は回答者数。記載のないものは回答者 1 名。二字下げは関連項目。☆は中丸による補足説明

### 【固有名詞】

アンデルセン（13）（※含：アンデルセン『人魚姫』（5））  
『人魚姫』（10）（※含：アンデルセン『人魚姫』（5）、童話「人魚姫」）  
コペンハーゲン（7）（※含：デマーク（コペンハーゲン）「人魚姫像（コペンハーゲン）」（2））  
デンマーク（6）（※含：デンマーク（コペンハーゲン）」）、北欧  
コペンハーゲンの人魚姫像（2）  
人魚姫像（札幌駅前）☆コペンハーゲンの人魚姫像のレプリカ  
『ドラえもん しあわせな人魚姫』☆ひみつ道具で『人魚姫』の絵本に入る  
※「人魚」それ自体ではなく「人魚姫」を連想する」というコメントあり  
ディズニー（10）（※含：ディズニー『リトル・マーメイド』（4）、ディズニー『ピーター・パン』  
『リトル・マーメイド』（7）  
アリエル（2）  
「アンダー・ザ・シー」☆『リトル・マーメイド』劇中歌  
劇団四季  
『ピーター・パン』（ディズニーその他）ネバーランドの人魚  
セイレーン（8）（含：『FFV』、『ロマンシング・サガII』）  
ゲーム『ファイナルファンタジーV』（セイレーン）  
ゲーム『ロマンシング・サガII』（セイレーン）  
高橋留美子『人魚シリーズ』（5）（含：高橋留美子、「人魚の森」）  
『崖の上のポニョ』（4）（含：ポニョ）  
宮崎駿（2）、スタジオジブリ  
『ウンディーネ』（4）（含：フケー『ウンディーネ』、『水妖記』）  
ローレライ（3）  
『麗しのメルジーナ』（3）（含：メルジーネ伝説）  
『赤い蝋燭と人魚』（2）  
小川未明  
スターバックス（2）  
中丸禎子（2）

半魚人（2）  
マーマン、人面魚  
僧魚、磯女、水木しげる  
人魚のミイラ（日本）  
八百比丘尼（2）（含：比丘尼伝説）  
不老長寿の秘薬としての人魚（日本、中国）  
昔ばなし「鯉女房」…人魚とは違うかもしれない。  
澁澤龍彦『高丘親王航海記』  
金角湾（ウラジオストク）  
安部公房 ☆『人魚伝』  
吉田秋生「マダム・ブエルの人魚」（『きつねのよめいり』所収）  
舟崎克彦『ぼっぺん先生の動物事典』  
ラウル・セルヴェ  
『パイレーツ・オブ・カリビアン 生命の泉』  
『ちょびっツ』（CLAMP）  
『ドラゴンボール』の初期に、亀仙人のところに悟空が連れてきた人魚  
『ワンピース』しらほし  
『ドラえもん のび太の魔界大冒険』☆ゲストキャラクターとして人魚が登場。  
チェンジマーメイド（電撃戦隊チェンジマン：幻獣に興味を持つきっかけ）  
漫画『南国少年パプワくん』タンノくん  
漫画・アニメ『瀬戸の花嫁』  
NOKKO「人魚姫」  
YUKI「コミュニケーション」  
カルトゥージア（Carthusia、イタリアの香水ブランド）のロゴ（？）  
ドイツ  
ワルシャワ市のワッペン  
八景島シーパラダイス  
深田恭子（が人魚を演じているCMがあったので）

## 【形容詞・普通名詞】

ジュゴン (8)

マナティ (2)

はかない (8) (含：泡のようにはかない、儂い)

泡 (3) (含：泡のようにはかない、海の泡)

薄幸 (2)、報われない、不幸、哀しい、悲劇、切ない

姫 ☆『人魚姫』に由来すると思われるイメージ

コペンハーゲンの人魚姫像がことあるごとに、いたずらされたり、破壊されたりしてニュースになる。身近な存在でもあり、つらい運命を背負っているイメージにもつながる。

女性 (7) (含：美女 (2)、赤い女性、女らしさ、女が多い)

上半身が美しく髪の長い女性で下半身が魚

赤い女性

母性

美しい (6) (含：美女 (2)、美)

かわいい、きれい、均整の取れた体

美形、あるいはとても醜い

可憐 (2)、やさしい

エロティック、妖艶、誘惑

裸、貝殻の胸当て

歌がうまい (2)

美声

長髪 (4) (含：長くて黄金の髪)

金髪 (2) (含：長くて黄金の髪)

涙 (2)

不老不死 (2) (含：不死)

泳ぎうまい

(川でも湖でもなく) 海を自由に泳いでいる

真珠

異類婚

異種婚、異界、タブー、契約

魔法、メルヘン

魂

不気味

気持ち悪い

オカルト

怪しいテレビ番組(「人魚のミイラ」などが登場する。最近あまりない?)

幼いころに『人魚の森』を読んだので、「人魚」というワードがトラウマ

捉えどころがない

肺呼吸なのかえら呼吸なのか

【知った時「意外だ」と思ったこと】

- ❖ ジュゴンなどの鱗を欠く海獣がモデルの一部である
- ❖ ジュゴンのような「獣」が同一視されることがあること
- ❖ 人魚のモデルがジュゴンであること
- ❖ マーマンのような男性の人魚もいること。
- ❖ 男性の人魚がいる、もしくは性を越えた対象である
- ❖ 「人魚」とは女性の上半身と魚の下半身をもつ「生物」だと思っていたので、「水の男」がいること、魂を持たないことなどは意外でした。
- ❖ スターバックスのロゴが人魚だったこと (しかも二股!)
- ❖ スターバックスのロゴが人魚だということ (これは中丸さんの書いたもの(?) を読んで知った)
- ❖ 人魚の肉を食べると不老不死になる。
- ❖ アンデルセン『人魚姫』のエンディングで、人魚姫が空気の精になること
- ❖ デンマークの人魚姫像は、実際はショボいらしいこと
- ❖ これまで人魚について見聞きしてきたことのうち、多くの話がどちらかというとも寒い地域 (アルプス以北のヨーロッパなど) に由来するように思います。このことは、現在 (特にディズニー以降) 一般的に描かれる人魚の世界が暖かな南海のユートピア的な世界であること (『リトル・マーメイド』では出てくる魚はおそらく熱帯魚、また、ディズニーに限らず、人魚は基本的に上半身裸なので、温暖なところにいる、というイメージがあるのかも知れません) と比べると、少し意外に思います。
- ❖ 人魚についてあまり知らないので意外なこともない
- ❖ 「意外だ」と思うようなことをまだ知らない (情報をあまり知らない)
- ❖ 何を意外と思ったか忘れてしまった

### 質問項目

あなたが持つ「人魚のイメージ」について教えてください

- (1) 「人魚」と聞いて思い浮かぶ固有名詞 (キャラクター、本・音楽・絵画・映画・漫画・アニメ・ゲームなどのタイトル、作者名、国・地域、都市など)
- (2) 「人魚」と聞いて思い浮かぶイメージ (形容詞、普通名詞など)
- (3) 「人魚」についてこれまでに知ったことのうち、「意外だ」と思ったこと

## 参考資料：人魚アンケート 集計結果

総回答者：東京理科大学「文学2」2017年度受講者30名（複数回答）

（ ）内は回答者数。記載のないものは回答者1名。一字下げは関連項目

### 【固有名詞】

アリエル（18）  
『リトル・マーメイド』（8）  
ディズニー（8）  
マーメイドラグーン ☆ディズニーランドのアトラクション  
人魚姫（10）  
アンデルセン（5）  
北欧の国々（アンデルセン出身地）  
『パイレーツ・オブ・カリビアン』（2） ☆「生命の泉」に人魚登場  
『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』（2）  
セイレーン、セイレーン（パズドラ）（2）  
『DQ』シリーズ  
『ONE PIECE』  
『赤い蠟燭と人魚』 ☆小川未明の小説  
漫画『海のトリトン』  
手塚治虫 ☆同作作者  
『崖の上のポニョ』 ☆スタジオジブリのアニメ。アンデルセン『人魚姫』が原案  
映画『ドラえもん のび太の人魚大海戦』  
ソフィア ☆同作ゲストヒロイン  
サシャ・カリス ☆写真家エレナ・カリスの娘。ハワイの海の中で撮影された写真で有名  
メロウ ☆アイルランドの伝説に登場する人魚  
わかさぎ姫 ☆ゲーム『東方 Project』の登場人物。書籍、音楽なども

※「リトル・マーメイドのアリエル」という回答は「リトル・マーメイド」1名、「アリエル」1名として集計

※※☆は中丸による補足説明

### 【形容詞・普通名詞】

美しい（17）  
きれい（6）（含「きれいな女性」）  
かわいい（3）  
魅力的（2）  
歌（8）（含「歌がうまい」「歌うと足がなくなる」）  
ハーブ  
女（7）（含「女性」「悲恋の女性」）  
悲恋の女性  
可憐  
清楚  
かわいそう  
不自由  
儂さ  
泡（人魚姫は最後に泡になる）  
恐ろしい、怖い、恐い（4）（「美しい」とセットになった回答2）  
血  
人喰い  
髪が長い（4）（含「髪の色が様々」「ひれ、体色も様々」）  
半人半魚（4）（「脚がない」「頭から腹～腰までが人間の姿」「下半身が魚」「魚人」「腰から上が『人』、下が『魚』」）  
マーメイド（3）  
魚（2）（含「魚と共存」）  
海  
『リトル・マーメイド』で人魚が泳ぐイメージ  
貝殻  
どうやって呼吸しているのか、何を食べているのか気になる  
両生類  
ジュゴン、マナティ（2）  
スターバックスのロゴ  
不老不死

## 参考資料：「人魚と聞いて思い浮かべるもの」アンケート

総回答者：中央大学「異文化交流演習」2016年度受講者 44名（複数回答）

（ ）内は回答者数。記載のないものは回答者 1名。一字下げは関連項目

### <作品・人物>

映画『リトル・マーメイド』(29)  
 アリエル (17)  
 メロディ、アースラ、ディズニーシー  
 ハイネ『ローレライ』、ローレライ伝説 (19)  
 映画『パイレーツ・オブ・カリビアン 生命の泉』(11)  
 アンデルセン『人魚姫』(7)  
 漫画『ワンピース』(5)  
 魚人島、魚人族 (2)、しらほし姫  
 漫画・アニメ『ぴちぴちぴっち』(4)  
 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(3)  
 バッハマン『ウンディーネ行く』(2)  
 映画『スプラッシュ』(2)  
 半魚人 (2)  
 『ピーター・パン』  
 『グリム童話』  
 ジロドゥ『オンディーヌ』  
 スタバロゴ  
 小川未明『赤い蝋燭と人魚』  
 漫画『だぁ！だぁ！だぁ！』  
 児童文学・漫画・アニメ『妖怪ナビ・ルナ (2) 人魚のすむ瑚』  
 アニメ『プリキュア』  
 アニメ『07-GHOST』  
 漫画・アニメ『ドラえもん のび太の人魚大海戦』  
 アニメ『崖の上のポニョ』  
 漫画『地獄先生ぬ〜べ〜』の速魚  
 ゲーム『ぷよぷよ』  
 うろこさかなびと、すけとうだら  
 Sound Horizon  
 八百比丘尼

漫画『名探偵コナン そして人魚はいなくなった』  
 人魚のミイラ  
 ゲーム『ゼルダの伝説 時のオカリナ』のゾーラ  
 族  
 ゲーム『SIREN』  
 セイレーン (ゲーム)  
 ウンディーネ (ゲーム)  
 アフロディーテ  
 深田恭子

### <イメージ>

美人、かわいい (14)  
 声がきれい、歌がうまい (11)  
 女性、女、女の子 (7)  
 男はいない  
 海、水 (6+1=7)  
 人間になりたい、人間界へ行きたい (7)  
 声と脚を引き換える (2)  
 人間になれる (2)  
 長い髪、美しい髪 (6)  
 ジュゴン、マナティ (6)  
 人間(船乗り)を誘って毎朝引きずり込む、波でさらう (5)  
 船を迷わす (2)  
 船を沈める歌  
 ハープ  
 (怒らせると)怖い (3)  
 岩の上 (3)  
 髪をとかさ  
 デンマークの人魚像 (3)  
 デンマーク (2)

不老不死 (2)  
 人魚の鱗、血肉で不死になる (2)  
 悲恋 (2)  
 バッドエンド  
 悲しい  
 上半身が人間、下半身が魚  
 足がない、うろこ  
 上半身は裸 (ビキニ)、貝  
 楽しく生活  
 仲間意識、魚と仲が良い、お父さんが過保護  
 意志の強さ、好奇心が旺盛  
 人を憎む  
 かれん、愛情深い  
 歌のモチーフ  
 泳ぐのが速い  
 魚でも人間でもない謎のキャラ  
 怪物的  
 SF的  
 UMA (未確認生物)  
 人類の夢  
 マーメイド  
 魔女  
 王子  
 船の先端の女性  
 海女  
 魚

### <疑問>

何を食べるの？  
 人の形をした魚なのか、魚の形をした人なのか？